

新自由主義とファシズムの親和性について

新自由主義がファシズム的に顕れていることがあります。なぜ、新自由主義とファシズムに親和性があるのでしょうか？

新自由主義とファシズムの親和性

新自由主義は資本主義のグローバリゼーションが世界を覆ったときに、資本主義体制を維持し、そしてその原理としての悪無限的利潤を追求するためには、競争原理を徹底し、外へ向かっていく搾取・収奪を内にも更に強化せざるをえなくなりました。それだけでは、ファシズムにつながりません。競争原理を徹底しても、そこから起きる矛盾を福祉政策で補正・修正していく途もあるからです。ですが、福祉を縮小する・切り捨てるとき、何をもって、資本主義体制を維持していくことができるのか、ローザ・ルクセンブルクのいう「継続的本源的蓄積」としての差別の宣揚・強化なのです。そこで、ファシズムの指標である「国家主義」と「差別主義」とにリンクするのです。

そもそもグローバリゼーションということは、左派のネグリ／ハートが『<帝国>』の中でも展開していたことです。そこでは、資本も労働者も国境を越えて移動していく構図で、ふたりは、国民国家が意義をもたなくなると主張していました。ですが、継続的本源的蓄積のためには、むしろ、国家主義が必要になるのです。だから、「国家主義」と「差別主義」とリンクする新自由主義がファシズムと親和性をもち得るのです。

日本維新の会の新自由主義とファシズム的性格

維新の会は、そもそも「行政改革」と「地方分権」と「脱原発」を掲げて右派ポピュリズム的新自由主義的政党として出発しています。ですが、その政治手法は、スケープゴートとして、公務員への攻撃やリベラルなマスコミ叩きをやって、差別的な心情で票集めをするということでした。「民主主義」の「少数意見の尊重」ということを切り捨て、もうひとつの「多数決原理」で勝ち負けの論理を振り回し、「対話」を口にするときは「やっつけ主義」で、これも差別的な手法です。新自由主義は一応グローバリゼーションですから、国境を越えて資本も労働者も移動するのですが、継続的本源的蓄積論の差別主義のためには、国家主義的扇動をし、排外主義的なことも言い出し、ファシズム的になっていきます。ただ、安倍晋三の手法として、本体(執行部・中心メンバー)では、保守層も巻き込むために、右派ポピュリズム的に突き出し、差別主義的なことは控え、周辺での極右的な部分を議員候補として立候補させます。また、そのような部分はいろいろ不正に手を染めるのです。ベーシック・インカムや福祉ということも口にします。ですが、竹中平蔵新自由主義者のベーシック・インカム論は、福祉切り捨ての「自己責任論」の「ベーシック・インカム」論なのです。その手法での「ベーシック・インカム論」にすぎません。

そして、「子どもの福祉」を口にし、「福祉」に熱心な党を装うのです。「福祉」と言っても、「子どもの福祉」は純然たる福祉ではありません。国家を担う次世代を担う者が必要ということで、しかも、流れ流れて維新議員になった西村真悟元議員が言っていたように

「国家のために死ぬる国民の教育」という国家主義的なことでしかありません。「社会的弱者」に措かれている高齢者や「障害者」や「病者」の福祉は切り捨てていくことになります。高市政権で、閣外協力にした意味は、高市極右政権が軍事予算増大と福祉の切り捨てに入っていくとき、閣内に入れば右派ポピュリズムの性格を棄て、極右性を露わにし、自民党極右政権に飲み込まれてなくなるからだ、わたしは押さえています。これは新自由主義的ファシズムと言い得ることです。

復古主義的ファシズムの再来

「国家主義」といっても中身的に、モンロー主義的国家主義もありますし、帝国主義(註1)的国家主義もあります。それを合体させたのがアメリカ・ファーストの国家主義を宣揚するトランプ・ファシズムです。歴史的に、裏で暗躍していたことを、正面切って、ベネズエラに「法と秩序」を歪曲して軍事的殺戮を始めています。アメリカが蔭で、そして、「人権とか民主主義」を掲げて真反対の戦争を繰り返していたのですが、それでも、表面で「人権」と「民主主義」を宣揚していました。もはや、嘘とペテンで塗り固めて、そのようなことを言い募るのかもしれませんが、「人権」と「民主主義」の破壊国になっています。

第一次トランプ政権のとき、真っ先にまだ大統領就任以前に、その下に駆けつけたのは、すでにファシズム的始動を果たしていた安倍晋三元首相でした。政治家や政治評論家で、「安倍元首相はアメリカとヨーロッパの間を取り持った」とかいつているひとがいるのですが、アメリカのトランプ・極右政権を孤立化させず、ヨーロッパ各国政府との間をとりもち、なおかつヨーロッパの極右を勢いづけ、世界にファシズム的なことを醸成していったのです。

パレスチナとウクライナ停戦へ努力しているので、ノーベル平和賞をとか言っているヨイショー従属外交を安倍元首相に倣って、それに共鳴する極右高市首相も言っているのですが、パレスチナへのジェノサイドを支え続けて、何が「平和」なのでしょう？——尤も、だから歴史修正主義がファシストの手法なのです。——

大政翼賛的ファシズムが本格的に始動・形成し始めている

第二次世界大戦後に、マスコミは大本営発表を垂れ流し続けてきたことを反省したはずだったのに、またもや、大政翼賛的に極右高市政権を持ち上げています。そもそもマスコミも資本ですから、資本主義の擁護に回るのですが、そもそもリベラル層をターゲットにした紙面作り・番組作りをしてきたマスコミも経営陣の大政翼賛的圧力の中で、リベラル的な記者やコメンテーターが離脱していき、マスコミ自体がリベラルな部分を排除して行きます。そして、インターネットの差別的な切り取り動画が、金儲けの手段にされ、再生・拡散されていきます。

リベラルなネット媒体も形成されてきています。その中で、何が問題になっているのかをきちんと押さえ、ファシズムの形成としての差別主義・国家主義を批判する勢力を理論的対話と深化の中で形成していくしかありません。

なぜ、ファシズム（国家主義・差別主義）にからめとられるのか？

大学で教員をやっていたリベラルな政治学者坂本義和さんが、もうだいぶ昔の話ですが、毎年新しい授業で、「国家とは何か」ということで、学生達に議論をさせると、決まって「国家ということには実体がない」という結論に至るという話をしていました。このことは、実は坂本さんは別にマルクス派の政治学者ではないのですが、マルクス／エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』における国家＝幻想共同体論とリンクし、マルクスの流れから出てきた廣松渉さんの実体主義批判＝物象化批判ともリンクしていくのです。

昔から、政権の支持率を上げるには戦争を始め、愛国心を煽るのが一番の手法だといわれて来ました。「〇〇が攻めてくる」ということを相互の国が言い募り、わざわざ緊張感を高め、それで互いに、それで支持率を上げ、体制を維持しようとするのです。おまけに、金儲け主義の死の商人や軍事産業が政治献金をして、その体制を維持・培養し続けるのです。それで、世界から戦争がなくならないのです。

その上に、差別主義的扇動がふりまかれ、いとも簡単に、ファシズム的なことが醸成されていくのです。

戦争とファシズムの危機にいかに対処するのか？

極一部のひとを除いて戦争を進んで推進しようとするひとはいません。「相手が攻めてくる」のだから、それを抑止するために軍事が必要なのだという論理です。ですが、その抑止ということを互いに言い募り、危機を醸成していくのです。そこで前項の「そもそも国家とは何か」という問いかけと国家主義批判を推し進める必要があるのです。

もうひとつは差別主義の問題です。人権論を批判するひとはいますが(註2)、差別を差別として煽るひとは極めて少数です。差別が暴力であるということを押さえて、無制限の殺し合いを推奨するのか？ と問いかけると、賛同するひとはほとんどいません。

だから、反差別と国家主義批判で、一部極右差別主義者・国家主義者を攻め、まとわりついている揺動的なひとたちを引き剥がしていくことなのです。

(註)

1 ネグリ／ハートは『<帝国>』の中で、ポストコロニアリズムの時代には、「帝国主義」概念は、かつての前資本主義時代のアジア的専制支配の概念として、現代は経済的支配としてのグローバリゼーションの時代となっていると押さえました。いわゆる「先進国」では、民主主義や「人権」が叫ばれて(その蔭で民主主義とは真反対のことを、アメリカやロシアがおこなって)いました。ですが、グローバリゼーションが世界を覆って、しかも、資本主義が継続するとき、継続的本源的蓄積としての、ロシアのウクライナ侵略戦争や、イスラエルのパレスチナへの軍事的なことも含んだ植民が起きてきます。これを「帝国主義」と呼ばずして、「帝国主義」はありえるのでしょうか？

2 高市政権の下で財務大臣になった片山さつき議員は、「人権は架空の概念だ」という話をしていました。そもそも人権論は「天賦人権論」というキリスト教文化圏で起きた概念で、それで、時には「人権を守るため」帝国主義的侵略と戦争に使われてきた歴史もあ

ります。ですが、「人権」を架空の概念としても、差別は現実に行っていることで、それをどうするのか、そもそも差別が暴力であるということを押さえたところで、「無制限の暴力を是認するのでしょうか？」と問うて行くことです。 (み)

(「反差別原論」への断章) (113) としても)